

ハウスエダマメの出荷形態に適した栽培管理技術開発

【背景と目的】

江東地域のエダマメ栽培はコマツナに次ぐ生産があり、ハウス栽培も盛んに行われている。市場のほか、農協直売所、庭先直売所でも人気の品目であり、荷姿として、枝付き束出荷、切り枝出荷、莢もぎ出荷など多様な形態で出荷される。こうした中、生産者からは出荷調整の省力化と出荷形態ごとの商品性向上が求められている。そこで、生育期間中の草姿の制御を中心に、ハウス栽培エダマメの出荷形態に適した栽培法を確立し、作業性と商品性の向上を図る。

【研究概要】

品種は「とびきり、夏枝、初だるま、福だるま、陽恵、おつな姫」の6品種を供試し、条間45cmの初生葉摘芯区、2本植区および条間15cm区を設置した。枝付き束出荷：摘芯区では、ほとんどの品種で枝付き束出荷に適した草姿となり、作業性と商品性が向上したが、収量と3・4粒莢率が低下した。しかしながら、摘芯区の「福だるま」は枝付き束出荷に適した草姿でありながら、非摘芯区と比べ抑制栽培で91%、半促成栽培で78%の莢数を確保した。切り枝出荷：摘芯区は茎径と節間長が小さく、切り枝出荷に適する草姿となる。品種では「福だるま」の摘芯区は切断回数が少なく、最も優れた。なお、2本植区と条間15cm区は、倒伏程度や切断回数が大きく、枝付き束出荷や切り枝出荷には適さなかった。莢もぎ出荷：摘芯区では“枝飛び”が多い傾向があり、莢もぎ出荷には適さない。品種としては、半促成栽培と抑制栽培でバラツキがみられたが、「とびきり、初だるま、福だるま」の3品種は莢数と3・4粒莢率の点で安定した。